古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究

課題番号　0845187
平成８年度～平成10年度科学研究費補助金
（基盤Ｂ・一般２）研究成果報告書

研究代表者　都出比呂志
大阪大学文学部教授

1999年３月

大阪大学文学部

III　調査報告

例　　言

1　本報告は京都府長岡京市井ノ内稲荷塚古墳第５次調査（前方部埋葬施設の調査）および同市井ノ内車塚古墳の測量調査の概報である．

2　この調査は，文部省科学研究費の補助金（代表　都出比呂志）を受け，大阪大学文学部助教授福永伸哉を団長，同助手杉井健を調査担当者とする調査団を組織して行った．調査期間は1997年７月15日から８月22日である．

3　調査には大阪大学文学部考古学研究室の学生が主として参加した．以下にその名前を記す．高田健一，大林元，寺前直人，豊島直博，西谷彰，宮崎認，岡寺良，林正憲（大学院文学研究科），岡山真司，角田亜希乃，衣畑真紀子，忽那敬三，笹野雅夫，隅谷記子，兵知典，藤井章徳，村田真一，柳田裕子，重松辰治，竹中永音，多田素子，中村大介，伊藤文彦，石井智大，瀬川貴文，中原計，福辻淳，前田敬映，森岡環，山本悠司，渡辺佑典（文学部），後藤理加，田尻義了，難波紀子，吉田博子（文学部研究生）岩本崇，玉井みゆき，細山田章子（文学部聴講生）石川浩士，高松雅文（考古学研究会）．

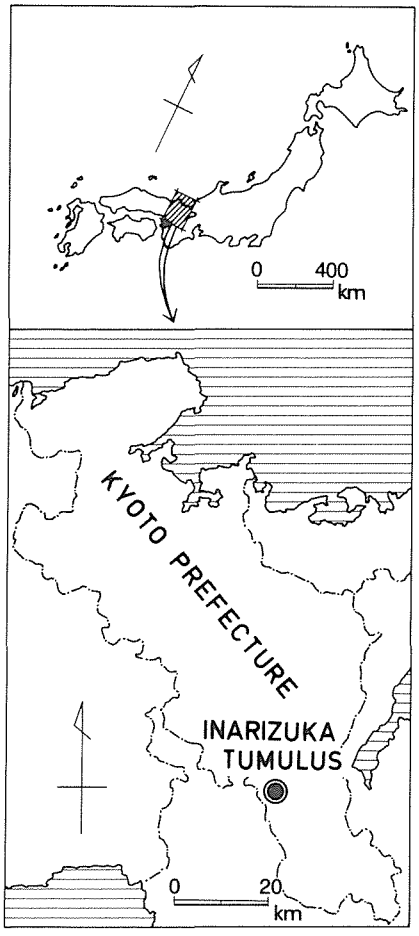


図１　本調査位置図

4　遺物の整理には調査参加者と上田健太郎，三浦俊明（大学院文学研究科），和田一之輔（文学部）が従事した．製図分担は挿図目次中に記した．調査現場での写真は杉井と高田が，遺物写真は文学部助手清家章と寺前がおもに撮影した．

5　レベル高はすべて海抜を表わす．方位は，図６が磁北を示す以外，すべて座標北である．

6　本概報は，福永，清家，高田，寺前，西谷，宮崎，岡寺，林が執筆し，分担は文中に示す．

7　調査の実施にあたっては長岡京市教育委員会および長岡京市埋蔵文化財センターにお世話になった．調査地の地権者林三代次氏には調査を快諾され，隣接地の地権者には調査遂行に御協力をいただいた．記して感謝したい．

8　本報告の編集は，福永の監修の下に，清家が担当した．

井ノ内稲荷塚古墳第５次調査概要

目　　次

例言
1　調査経過……51
2　検出遺構……57
3　出土遺物……61
4　総括……67

図　版　目　次

図版１　調査区全景（西から）
図版２　1　木棺全景（西から）
2　副葬品配置状況（西から）
図版３　1　木棺東小口（西から）
2　木棺西小口（西から）
図版４　1　土器副葬状況
2　高杯副葬状況
3　杯・短頸壺の内部
4　杯６の内部
5　土器取り上げの状況
図版５　1　短刀・玉類出土状況
2　鉄鏃・手玉出土状況
図版６　1　装身具
2　短刀
3　鹿角製刀装具（表）
4　鹿角製刀装具（裏）
図版７　1　鉄鏃（１）
2　鉄鏃（２）
図版８　棺内副葬須恵器

挿 図 目 次

図1　本調査位置図（忽那敬三製図）……48
図2　周辺の古墳と地形（後藤理加製図）……52
図3　井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳の位置（瀬川貴文製図）……53
図4　井ノ内稲荷塚古墳後円部横穴式石室……54
図5　第5次調査風景……54
図6　井ノ内車塚古墳測量図（岡寺良製図）……55
図7　井ノ内稲荷塚古墳トレンチ配置図（岡寺製図）……56
図8　墓壙平面・断面図（寺前直人製図）……59
図9　木棺の構造と副葬品の配置（林正憲製図）……60
図10　玉類（三浦俊明製図）……61
図11　短刀（西谷彰製図）……62
図12　鹿角製刀装具（藤井章徳製図）……62
図13　鉄鏃（林製図）……63
図14　棺内須恵器出土状況（前田敬映製図）……64
図15　棺内副葬須恵器（中原計製図）……65
図16　その他の遺物（石井智大製図）……66

井ノ内稲荷塚古墳第5次調査概要

1　調　査　経　過

（1）歴史的・自然的環境

井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳の存する乙訓地域は，京都盆地の南西部に位置し，大阪方面からの京都盆地への入り口にあたる．奈良時代あるいはそれ以前から古山陰道が通り，その後も西国街道・久我畷など重要な古道が開かれることからもわかるように交通の要所である．地形的には西は西山山塊，東は桂川に挟まれた空間であり，西山山塊から延びた丘陵や低位段丘と桂川と小畑川によって形成された沖積地に分けることができる．

こうした交通の要所である乙訓地域には，数多くの古墳が築かれているが，首長墓系譜は大きく3グループに分けてとらえることができる[(1)]．樫原・山田グループ，向日グループ，長岡グループである．各グループは，古墳時代を通じて安定して首長墓を営む訳ではない．時期によっては大規模な墳丘をもつ首長墓を築造する系譜もあれば，それに反比例するように首長墓が絶えてしまうグループもあり，こうした首長系譜の盛衰は乙訓地域の首長層の動向だけではなく，大王勢力を含んだ大きな政治的変動を反映していると考えられている[(2)]．

古墳時代前期で規模の大きな首長墓をまず最初に築くのは向日グループである．ここでは西山山塊から派生する向日丘陵上に元稲荷古墳，五塚原古墳，寺戸大塚古墳，妙見山古墳などの全長100m内外の前方後円（方）墳が前期を通じて築かれる．向日丘陵の北側の京都市樫原付近では，向日グループより若干遅れて一本松塚古墳，百々池古墳，天皇ノ杜古墳と続く首長墓の系列が形作られる．これに対し稲荷塚古墳や車塚古墳が位置する乙訓地域西南部の長岡グループでは南原古墳以外に首長墓は認められない．

中期になると，逆に長岡グループの勢力が拡大し，今里車塚古墳，恵解山古墳が低位段丘上に築かれる．それに呼応するように，樫原・山田グループや向日グループでは顕著な規模を持つ首長墓が一度途絶えてしまい，向日グループで伝高畠陵，南条3号墳，山開古墳などの円墳が築造されるにとどまる．また，この頃になると一辺十数m規模の小規模な古墳が増加する．これらの小規模古墳には，南原東古墳群や井ノ内古墳群のように首長墓近辺に築かれたものと開田古墳群のように集落の周辺に築かれたものがあり，前者は首長に連なる集団の有力者，後者は集落の小首長あるいは有力者の墓と想定されている．中期後葉になると，恵解山古墳ほど突出した規模の古墳は見られないが，樫原・山田グループで再び首長墓が築かれる．巡礼塚古墳，穀塚古墳，山田桜谷1号，2号墳である．さらに後期にはいると向日グループに物集女車塚古墳が築造される．物集女車塚古墳は墳丘全長45mを測る前方後円墳であり，後円部に右片

図２　周辺の古墳と地形

袖式の横穴式石室を持つ．石室内には家形石棺と金銅装の馬具などの副葬品が納められており，当古墳はこの時期の乙訓地域を代表する古墳であることは間違いない．

一方，長岡グループでは，物集女車塚古墳と相前後して井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳が築造された．とくに，稲荷塚古墳の墳丘規模は物集女車塚古墳とほとんど同じであり，調査

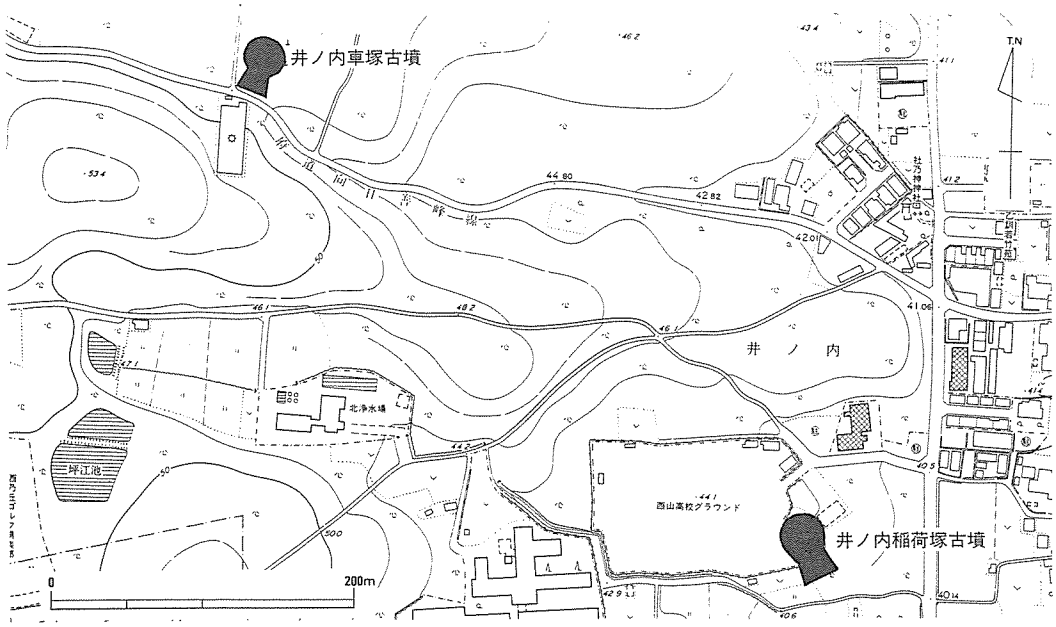


図３　井ノ内稲荷塚古墳と井ノ内車塚古墳の位置

団の調査によって後円部に物集女車塚古墳に匹敵する大規模な横穴式石室を持つことが判明した．このことは，この時期の乙訓地域における首長間の勢力関係を考える上でまことに重要である．この後，６世紀後半になると今里大塚古墳が築かれる．今里大塚古墳は直径45ｍの円墳とされてきたが，全長80ｍの前方後円墳の可能性も指摘されている．山城でも最大級の横穴式石室を有しており，巨大な勢力を持った首長の存在が想起される．この古墳をもって，この地域の大型古墳の築造は終了する．（清家）

（２）調査経過

過去の調査　井ノ内稲荷塚古墳は，1960年代後半に京都府教育委員会によって墳丘測量が行われていた[(3)]ものの，その詳細は不明のままであった．

第１次調査は大阪大学文学部考古学研究室を主体とし，1993年に測量調査（３月15日～23日）及び墳丘発掘調査（７月20日～８月11日）が実施され，残存している墳丘が全長46ｍ，後円部径約29.5ｍであることや，埴輪や葺石は施されていないことなどが判明した．以後，第２次調査から第４次調査は長岡京市教育委員会が主体となり，大阪大学井ノ内稲荷塚古墳調査団によって実施された．

第２次調査では（1994年７月20日～８月11日），後円部に横穴式石室，前方部に木棺直葬が確認され，第３次調査（1995年７月21日～８月18日）では，横穴式石室のほぼ全形が良好に保存されていることが判明した．また，クビレ部墳頂で須恵器が集中して検出された．

第３次調査の成果を踏まえ，1996年には，横穴式石室の時期，規模，構造，及び石室内部の解明を目的として第４次調査（７月15日～10月４日）が行われた．この調査では，多くの須恵

器，馬具，金属製品が出土したほか，組み合わせ式の箱形木棺も検出され，また，石室の構築過程や前庭部の様相なども判明し，大きな成果を上げた．

第５次調査の経過　第２次調査で検出された前方部の木棺の規模・構造・木棺内部の様相を解明することを目的として第５次調査を実施した．調査主体は大阪大学文学部考古学研究室で，期間は1997年７月15日から８月22日までの約１ヶ月間である．

発掘区は前方部墳頂部に１箇所設定した．調査面積は拡張区を含めると47.5㎡である．発掘区を設定した時点で，折からの集中豪雨のため土砂災害の危険から宿舎の避難勧告が出された．宿舎を移す間，多少の中断もあったが調査は進められた．発掘はまず墓壙の検出から始まり，地表から約１ｍほど掘り下げた地点で平面的に墓壙の掘方を確認することができた．そして，墓壙の掘方にしたがって掘り下げたところ，木棺を検出した．８月６日からは木棺内部の調査を始め，第２次調査で存在が知られていた須恵器の他に，水晶製の玉類，銀製耳環，鉄製品などの副葬品を検出した．また墓壙より後円部側で，別の掘り込みを検出したため，拡張区を設定し調査を行った．そして，ほぼ記録作業が終了した８月16日には現地説明会を実施することができ，100名あまりの参加者を得た．その後若干の記録作業を行った後，土のうを用いて埋め戻し作業を行い，22日にはすべての作業を終了した．（岡寺）

井ノ内車塚古墳の測量調査　井ノ内車塚古墳は長岡京市井ノ内頭本に所在する前方後円墳である．小畑川によって形成された低位段丘上に立地し，前方部を南側に向ける．その北西には前方後円墳１基を含む13基の古墳からなる芝古墳群が展開している．

車塚古墳は，1968年に京都府教育委員会によって測量調査が行われた[4]が，それ以降本格的な発掘調査は行われたことがない．出土遺物や埋葬施設に関する情報もほとんど知られておらず，墳丘の平面形から古墳時代後期と推測されるにとどまっていた．1968年の測量調査の成果によって，後円部と前方部に大きな盗掘坑が存在すること，とくに後円部のそれは墳丘をほとんど寸断する規模のものであることや，墳丘西側が大きく削りとられた状況をみてとることができる．このような状況は30年以上の歳月を経た現在でも，大きく変わっていない．以下では墳丘

図４　井ノ内稲荷塚古墳後円部横穴式石室

図５　第５次調査風景

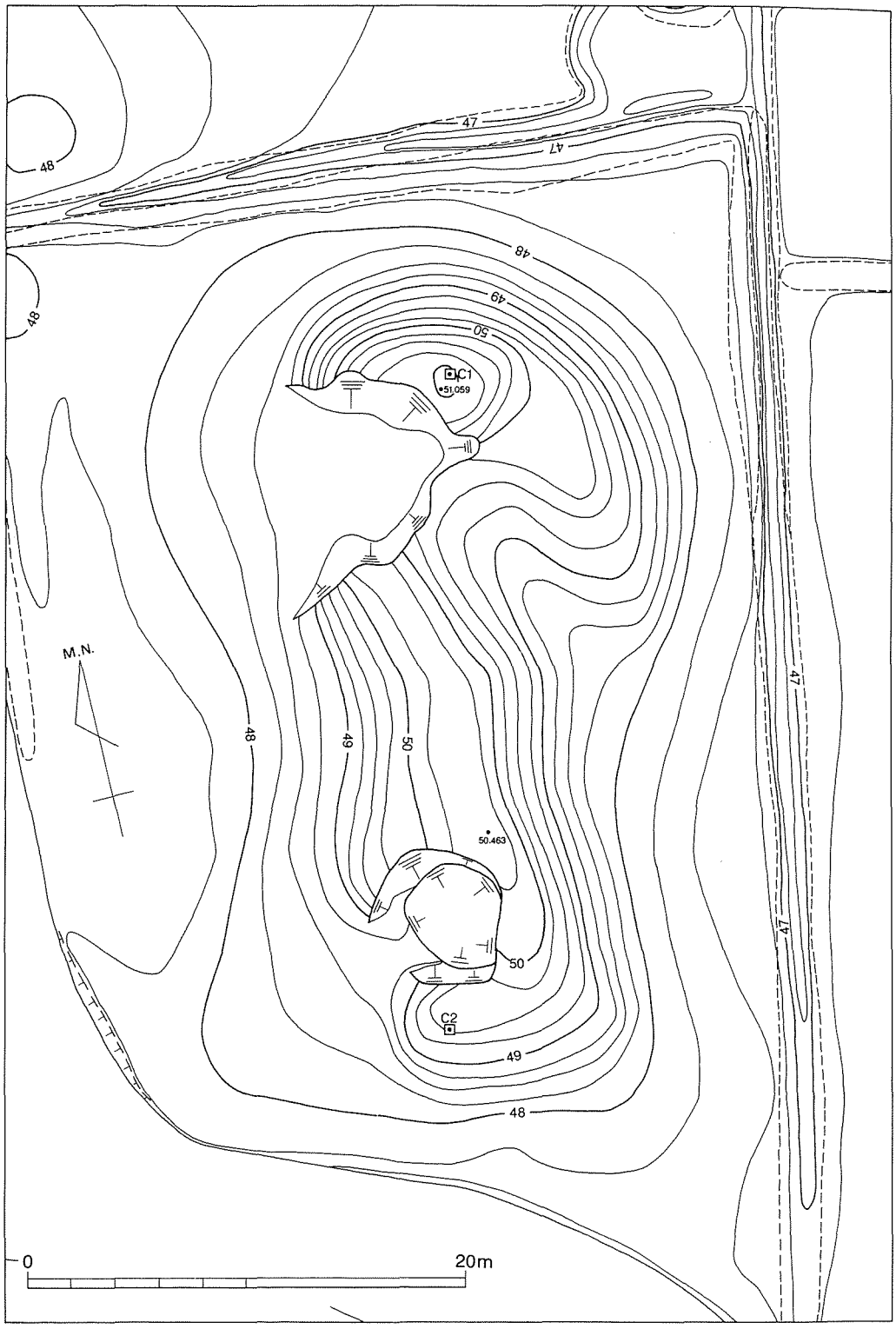


図6　井ノ内車塚古墳測量図

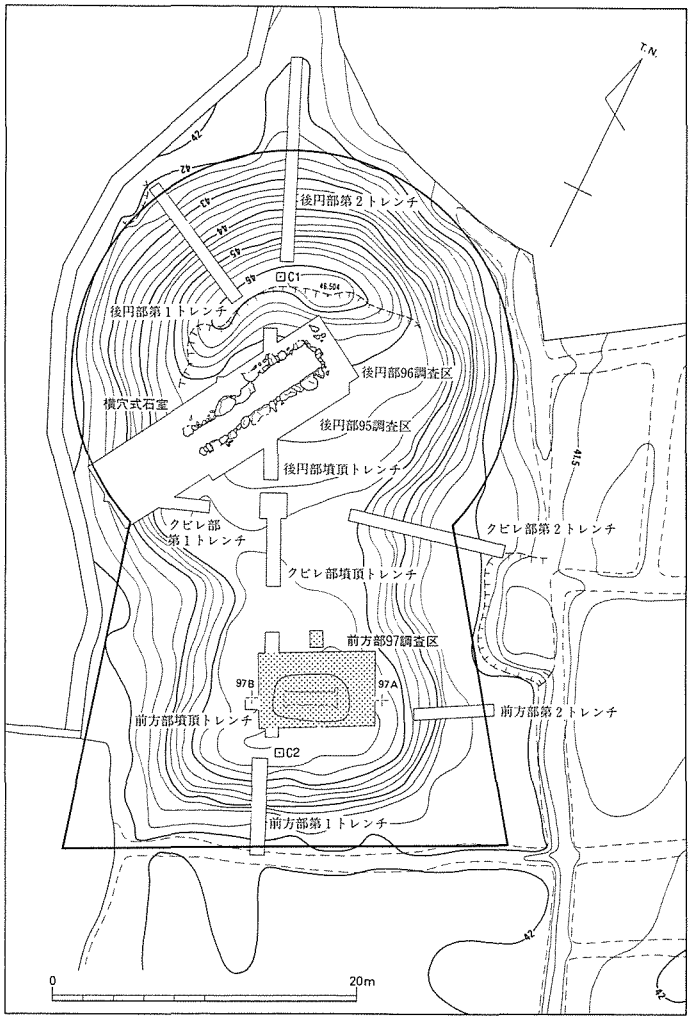


図７　井ノ内稲荷塚古墳トレンチ配置図

各部分の状況を新たに作成した測量図に基づいて記する．

後円部は西側から大きな掘り込みがなされ，後円部の約６分の１はほぼ完全に削平されている．その掘り込みは墳丘東側のクビレ部に当たると思われる部分にまで達しているため，墳丘はクビレ部を境にほとんど寸断されていると言ってよい．後円部の北側から東側にかけては，等高線が比較的整然とめぐるため古墳本来の形状を示している可能性が高いが，墳丘のすぐ北側に存在する土地区画のための溝によって墳裾部分は削平を受けている可能性がある．また，残存する墳丘の最高点からやや東よりの部分には壇状に平らになった部分があるため，墳丘上にも削平が及んでいると考えられる．東側クビレ部は残存している可能性があるが，西側クビレ部は完全に削平されている可能性が高い．

前方部にも墳丘西側から大きな掘り込みがなされているが，後円部に存在する掘り込みのように墳丘を寸断するには至っていない．前方部の等高線をみると，東側斜面の南よりの部分から前方部前端にかけては古墳本来の形状を比較的よく残しているようである．しかし，前方部東側コーナーは円弧状を呈し，前方部前端は墳丘勾配が約20°と緩く低平なため，平面形を保ってはいても実際には大きく削平を受けている可能性が高い．測量図からは全長42ｍ，後円部径18ｍの前方後円墳と想定されるものの，上記のように，古墳には後世の改変行為が大きく及び，古墳の詳細な形状や規模は地形測量では推し量りがたい．古墳の正確な形状，規模の解明は発掘調査に委ねるべきであろう．（高田）

2　検　出　遺　構

（1）発掘区の設定

第2次調査において確認された墳丘主軸に直交する前方部埋葬施設を調査した．まず，南北5m，東西8mの調査区を設け(図7)，墓壙の面的な検出を試みた．その結果，現地表下約60cm，標高43.8mの地点で南北3.0m，東西5.0mの隅丸長方形の墓壙が検出された．

（2）埋葬施設の構造

それでは，まず埋葬施設の構造について述べていきたい(図8)．地表下80cm，標高44.5mから43.7mにかけては後世の掘りこみが認められるが，それ以下の黒褐色粘質土（11層）の堆積は均質であり，土師器細片（図16-1～3）数十点以外とくに新しい遺物は混じらない．したがって，この堆積は墓壙埋土であると考えられる．ただし，後述する木棺裏込土（15層）上の約30cmはやや異なる土層（12層）が認められ，墓壙埋土は大きく2層に分かれるようである．また墳丘盛土と墓壙埋土の関係で注目されるのは，東西，南北の各断面で墓壙埋土が20cm以上墳丘盛土の上に堆積している点である．後世の撹乱のためその上面の構造は不明であるが，2段墓壙あるいは墳丘構築過程において墓壙が掘削された可能性がある．墓壙は標高42.2mまで掘り下げられており，底部には黒褐色粘質土（18層）が厚さ30cmほど充填され，標高42.5m付近で木棺設置面が形成されている．つまり，墓壙底部に直接木棺を設置するのではなく入念な整地をおこなった後，木棺設置面を設定しているのが本埋葬施設の特徴である．また木棺裏込めとして褐色シルトが両側板外側に20cmほど積まれている．この裏込土上からは赤色顔料が点的に検出されており，棺内への遺体や副葬品の埋置がこの面で行われたと考えられる．

次に木棺の規模と構造について述べる．棺の外法は棺長約3.5m，棺幅は西側70cm東側80cmと東側のほうが西側に比べて10cmほど幅の広い組み合わせ式木棺であり，底板は検出されなかった．深さは現状で20cmを測る．また木棺材はその大部分が腐食により失われていた．しかし，土質の相違から西側小口板は厚さ15cmで長側辺に対しT字状に組み合わさり，北側板とは直接接していないと考えられる．東側小口板は残存状況が悪く不明な点が多いが，断ち割り等の情報に基づけば，厚さ4cm以下と西側と比べて薄い．また，長軸に対し南側に偏り平面的にはL字状に組み合わさり，両側板と直接は接していないという構造が推定される．さらに，棺の東小口から28cm，西小口から20cm内側には幅15cmの丸太材痕跡が浅い掘り込みを伴い検出された．前述したように両小口板と側板は直接接していないことから，丸太材に切り込み等の加工がなされ，そこに側板が組み合わさることにより，両側板が支えられていた可能性が考えられる．なお，木棺裏込土内より鉄片が数点出土している．

以上の成果から前方部埋葬施設の構築過程は次のように復元できよう．まず，墳丘構築終了後あるいは構築過程で，長辺5m短辺3m深さ1.6m以上の墓壙を掘削する．次に底面に厚さ30

cmほど黒褐色粘質土（18層）を充填し，標高42.5m付近までかさ上げする．そして側板の台となる丸太材を木棺の主軸と直交する方向に埋置した後，両側板を丸太材の上に固定し，裏込土をその外側に積む．以上のような工程が遺体安置以前に行われたと考えられる．また，この丸太材は棺内の仕切り板の機能も合わせもつようである．さらに全体に赤色顔料を散布し，丸太材によって仕切られた東側区画内に須恵器，中央区画内に被葬者と鉄刀や鉄鏃を埋置した後に棺蓋を載せる．そしてその後，墓壙を埋め戻す．また墓壙埋土は，先に掘削した墓壙を20cm以上越えて盛り上げられている．

また，トレンチ北側において一辺3.2mの土坑が検出されている．この土坑の性格を確認するために，トレンチ北辺に南北1.2m，東西0.9mの拡張区を設けた．その結果，この土坑は標高43.2mで平坦になることが判明した．このレベルは先の埋葬施設より約70cm高い位置である．この北側土坑埋土からは須恵器の高杯の脚部（図16-5）が出土しており，この土坑の掘削時期や性格を考える上で重要な資料である．ただし，この土坑の性格については，拡張トレンチでは埋葬施設とする手がかりが得られず，また堆積土も墓壙埋土に比べるとやや均質性に欠けることから，もう1つの埋葬施設とする根拠に欠けているといわざるをえない．（寺前）

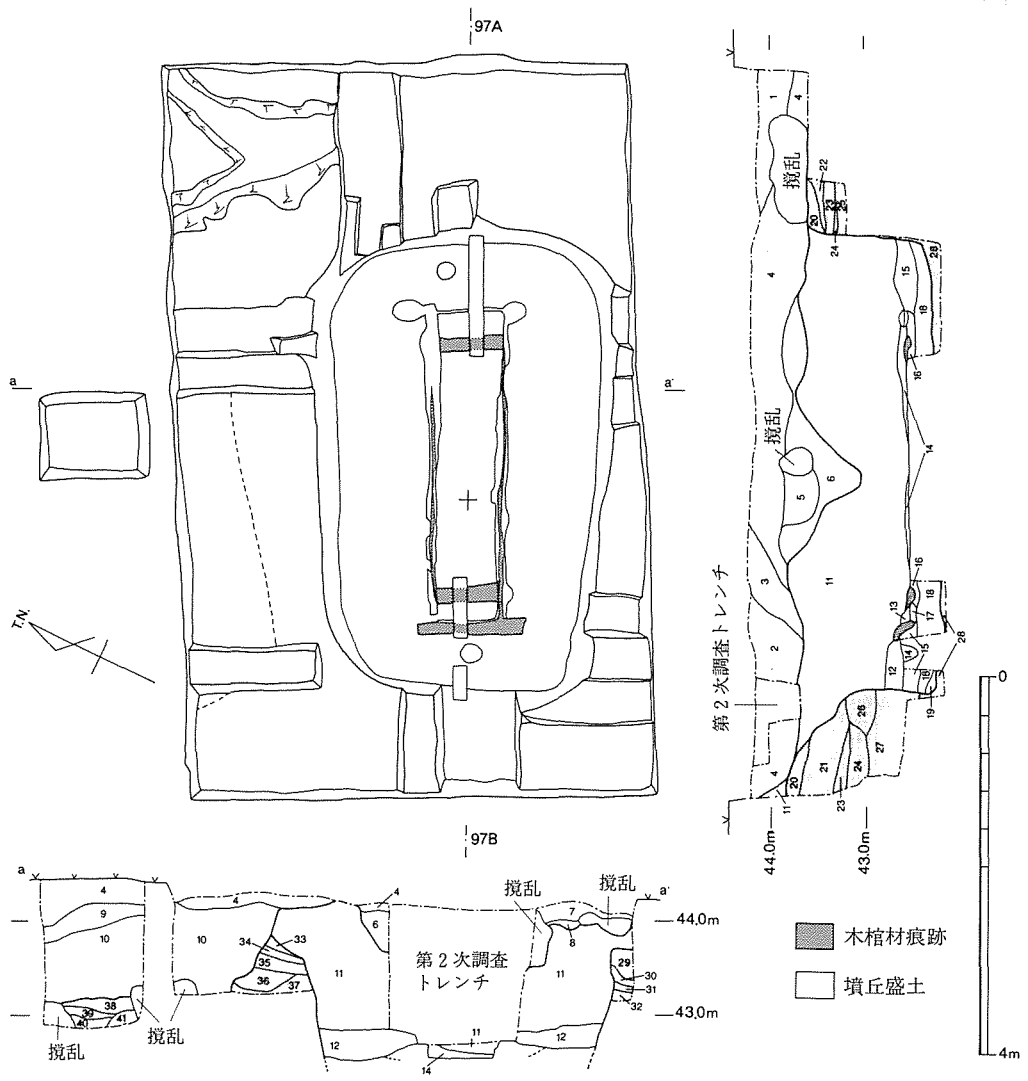
（3）副葬品の配置

今回調査した埋葬施設は盗掘を免れていたため，棺内の副葬品はほぼ完存の状態で検出された．ここでは，それらの出土状況について述べることにする（図9）．なお，棺内の区分については，棺内両側の丸太材を基準に，木棺の東小口板と丸太材の間の空間を東区画，東側丸太材と西側丸太材の間の空間を中央区画，西側丸太材と木棺西小口板の間の空間を西区画と称する．

まず，東区画からは須恵器がまとまって出土した．具体的には，北側から順に横瓶1点，高杯1点，杯身・杯蓋のセットが1組，短頸壷・把手付蓋のセットが1組，そして杯身・杯蓋のセットが並んで2組，計10点の須恵器が副葬されていた．このうち高杯は杯部を下に向け，倒立した状態で出土し，杯蓋はいずれも杯身に被せられた状態で出土した．そのため，区画中央部から出土した杯身の中から有機質の痕跡を検出することができた．なお，この区画からは面的に赤色顔料が検出され，一部は須恵器の外面にも付着している．

被葬者自身が葬られた中央区画からは，武器や装身具が出土している．まず，区画内北西寄りの位置から短刀が1点出土した．この短刀は刃を北側に，切先を西に向けた状態で検出された．また，刀身の大部分に木質が残存していたことから，木製の鞘に納められた状態で副葬されていたと推定できる．切先部は破損しており，本体から1cm離れた位置で検出されている．

次に中央区画内東寄り，中軸線上の位置から水晶製の算盤玉・切子玉と銀製耳環が2群に分かれた状態で検出された．具体的には，ほぼ中軸線上の位置で検出された耳環1点と算盤玉20点からなる一群と，やや北西寄りの位置で検出された算盤玉5点と切子玉1点からなる一群である．これらに加えて，この部分からは発掘時の不注意のために原位置を動いた状態で耳環1



1．2.5Y2/1黒色粘質土
2．10YR2/2黒褐色粘質土
3．10YR2/3黒褐色シルト
4．7.5YR2/2黒褐色粘質土
5．10YR2/2黒褐色粘質土
6．10YR2/2黒褐色粘質土60%
　に黄色粘質土40%縞状に混
7．10YR3/2黒褐色粘質土
8．10YR3/3暗褐色粘質土
9．10YR5/6黄褐色砂質土
10．10YR2/2黒褐色粘質土
　に黄色ブロック混
11．10YR2/2黒褐色粘質土
　に黄色ブロックが少量混
12．10YR2/2黒褐色シルト
13．10YR3/2黒褐色粘質土
14．7・5YR3/1黒褐色粘質土
15．10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
　に黒褐色土30%含む
16．10YR6/4にぶい黄褐色シルト
　に黒褐色砂粒30%含む
17．10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
　に黒褐色土15%含む
18．10YR3/1黒褐色粘質土
　に黄色ブロック40%含む
19．7.5YR3/2黒褐色粘質土
　に黄色ブロック30%含む
20．5YR1.7/1黒色シルト
21．10YR2/1黒褐色シルト
22．7.5YR5/6明褐色シルト
23．5YR1.7/1黒色シルト
24．7.5YR5/6明褐色シルト
25．5YR1.7/1黒色シルト
26．10YR2/2黒褐色シルト
27．10YR3/1黒褐色シルト
28．7.5YR2/1黒色シルト
29．10YR2/2黒褐色シルト
30．7.5YR1.7/1黒色シルト
31．10YR5/8黄褐色シルト
32．2.5Y2/1黒色シルト
33．2.5Y2/1黒色シルト
34．7.5YR2/2黒褐色シルト
　に明黄褐色シルト40%混
35．7.5YR2/1黒色シルト
36．2.5Y2/1黒色シルト
37．10YR2/2黒褐色シルト
38．7.5YR2/1黒色シルト
39．10YR2/2黒褐色シルト
40．7.5YR1.7/1黒色シルト
41．10YR4/4褐色シルト

図8　墓壙平面・断面図

点と水晶製算盤玉７点，切子玉１点の出土が確認されている．この部分からやや西側にかけて，赤色顔料が面的に広がった状態で検出された．この赤色顔料の状況と耳環の出土からみて，この部分が被葬者の頭胸部に相当すると考えられる．この玉類も，被葬者が身に付けていた首飾りであった可能性が高い．また，中央区画内中央部では，北側板に沿って玉類と鉄鏃が出土した．玉類は頭胸部周辺のものと同じく水晶製の算盤玉で，５点が出土した．鉄鏃はすべて柳葉形の長頸鏃で，完形を保っていないものが多いが，先端を含む破片の数から10本を確認することができた．これらのほとんどは切先を西側に向け，複数の鉄鏃が布で巻かれた状態で検出されたものもあることから，概ねまとまった状態で副葬されたことがわかる．但し，やや西寄りの位置に１本，中軸寄りの位置に１本，他の鉄鏃と離れた状態で出土したものもある．これらの遺物は，先述の頭胸部の位置から判断して，被葬者の手元に副葬されたものと推定できる．この部位から出土した玉類も，被葬者が身に付けていた腕飾りにあたると考えられる．

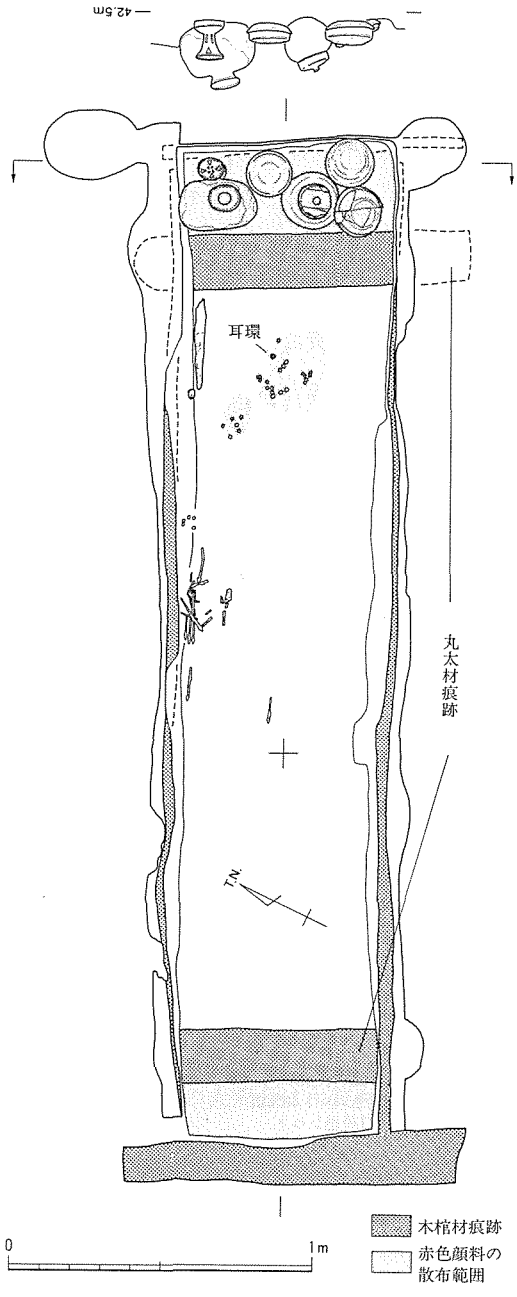


図９　木棺の構造と副葬品の配置

そして，西区画では遺物がまったく出土しなかったにもかかわらず，区画内の全面にわたって赤色顔料が検出された．この赤色顔料の広がりと，丸太材を設けて意識的に空間を作り出していることから判断して，この区画には有機質の副葬品が納められていた可能性が考えられる．なお棺外からは，裏込土内の鉄片以外に副葬品は検出されなかった．

このような副葬品の配列状況を見ると，稲荷塚古墳の南西にある長法寺七ッ塚古墳群[5]における副葬品の配列方法と共通点が指摘できる．稲荷塚古墳と近隣の古墳との関係を考える上で，重要な示唆を含むものであろう．

（林）

３　出　土　遺　物

（１）棺内出土遺物

装 身 具　棺内から出土した装身具には玉類と耳環がある．

玉類はすべて水晶製であり，合計39点が出土した(図10)．そのうち切子玉が２点，算盤玉が37点である．出土位置が明らかなもののうち，25点が短刀南側の木棺中軸付近，５点が短刀と鉄鏃の中間に当たる北側長側板沿いに集中していた．この状況から，前者（図10-６～13）は被葬者の首に，後者（図10-１～５）はその腕（手首）に装着されたと想定できよう．なお，断面五角形を呈する切子玉１点（13）は前者に属する．また，これらの周辺には赤色顔料が残存しており，玉類の表面や孔内部にもそれが一部認められる．法量に関しては，最大径1.2cm前後，高さ1.05cm前後を境として大きく二群に分けられる．そのうち６～８の３点は，最大径，高さとも突出しており，目立った存在である．これら大型のものは，いずれも首に装着されていたと想定されるものに属する．また，孔径については若干の差異が認められるものの，ほぼ最大径0.3～0.4cm，最小径0.1cmである．そのうち，穿孔の結果，作業最終面が欠けているものとそうでないものが存在するが，多くは前者の状況である．この他，木棺内北側の床面に近い部分のあげ土のふるい作業によって，９点の玉が回収された．そのうち１点（14）は断面六角形の切子玉である．

耳環は２点が出土した(図版６)．出土位置は，短刀南側の木棺中軸，つまり首に装着されたと想定される玉類の付近である．この状況から，耳環は耳に装着されていた可能性が高い．２点とも外形・断面形は正円に近い形状を呈しており，中実の銀製と推定される．１と２はとも

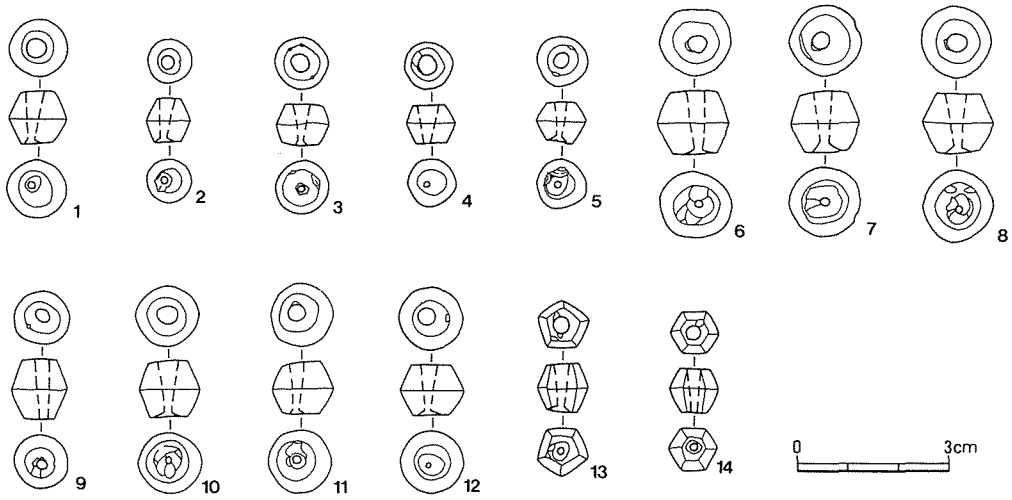


図10　玉類

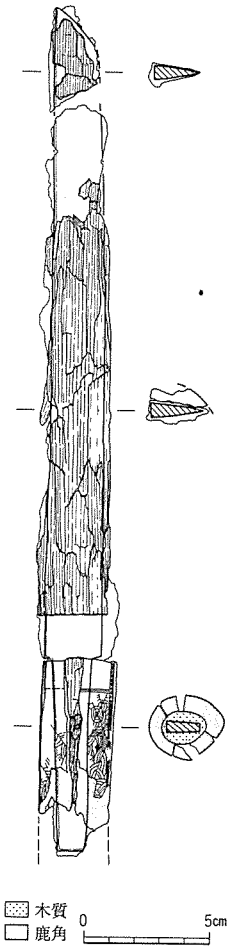


図11　短刀

に直径1.2cm，断面径２㎜を計る．現状の表面観察では，棒状のものを折り曲げて整形されたと考えられ，表面の一部に鍍金が残存していることが認められる．（西谷）

鉄製武器　鉄製武器は短刀と鉄鏃が出土している．

短刀は，東側丸太材付近の北側長側板に沿った位置から１点が出土した（図９・11）．部分的に破損しているため正確な全長は不明だが，現状で復元すれば32.9cmを計る．現存する刀身長は25.3cm，茎部長は7.6cmである．切先は西側を向き，刃は北側（棺外側）を向いている．直角両関である．刀身には，鞘と思われる木質が付着している．茎部には，木製装具の上に直弧文を彫り込んだ鹿角製装具が施されている．構図としては，側面部に見られるように平行線の区画を設け，直弧文が表裏面に施されるというものである．なお，区画相互の間隔は，約３㎜である．側面部の区画は，外側に一条の刻線を設け，内部の方形列点を浮き彫りすることで表されている．方形列点の単位は，１cmあたり５～６個である．直弧文は，区画内に２～３条の短い弧線を積み重ねることで表現されている．この種の直弧文を施す鹿角製刀装具の類例は，近隣の京都府物集女車塚古墳[6]，滋賀県鴨稲荷山古墳[7]にある．

鉄鏃は，短刀の西約60cm，東側丸太材付近の北側長側板に沿った位置から約10点が出土した（図13）．切先は一部を除き西側を向いている．いずれも長頸鏃である．半数近くが破損または細片となって検出されたため，正確な個体数は不明だが，鏃身の数量は10点を数える．完形に近い鉄鏃の全長は18～20cmである．鏃身は柳葉形で逆刺をもち，片丸づくりのものがほとんどである．頸部・茎部の断面形は，多くが長方形であるが，一部茎部においては円形を呈するものがある（２・７）．鏃身の長さは1.9～2.6cm，幅は1.1cm前後である．長さに関しては，2.5cm前後が４点（３・５・６・10），2.2cm前後が５点（１・２・４・７・９），1.9cmが１点（８）と三群に分けられる．頸部の長さは，残存するもので7.3～8.7cmを計る．このうち８cmを越えるものは，７点中３点（１・２・７）である．幅は１cmに満たない．茎部は，完存するものが２点あるが，それ

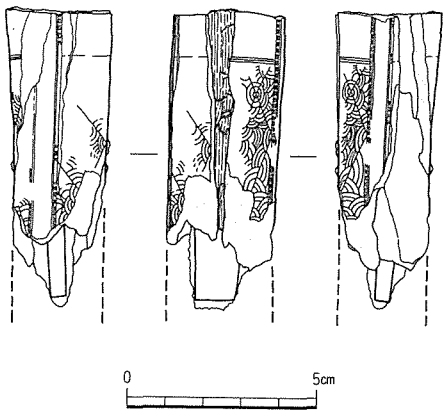


図12　鹿角製刀装具

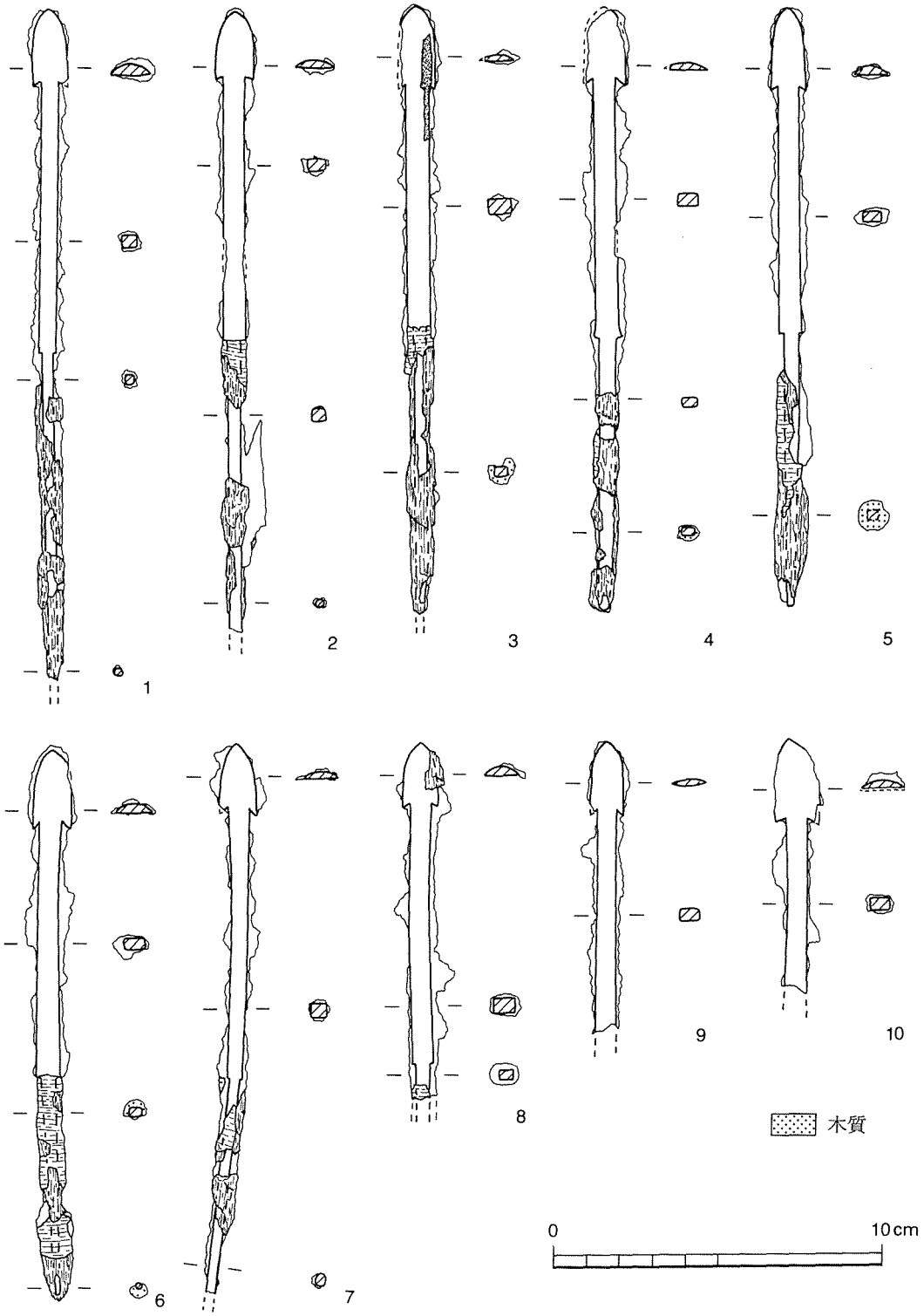


図13　鉄鏃

ぞれ8.2cm（5）と6.6cm（6）である．一方，欠損しているものの中で最長は，9.8cm（1）である．幅は0.5cm前後におさまるものが多い．また，茎部に木質や樹皮の痕跡が遺存するものが多い．（西谷）

須恵器　前方部木棺内東区画からは計10点の須恵器が一括で出土した(図15)．すべて完形品である．杯蓋と杯身の3組および短頸壷と壷蓋は組み合わさった状態で出土している．以下各器種ごとに詳述する．

杯蓋（図15-1～3）　1は口径15.6cm，高さ4.2cmである．口縁端部は内傾し，不明瞭ながらも段をもつ．天井部と体部の境界には凹線がめぐる．上面のケズリは反時計回りに外面の約3分の2の範囲に施される．外面には赤色顔料の付着が認められる．2は口径15.3cm，高さ4.9cmである．口縁端部には明確な段をもつ．天井部と体部の境界には凹線がめぐる．ケズリは時計回りに外面の約3分の2に施される．外面には赤色顔料の付着が認められる．また，外面には一直線のヘラ記号が施されている．3は口径14.4cm，高さ4.2cmである．口縁端部は内傾する．天井部と体部の境界には不明瞭ながら凹線がめぐる．ケズリは反時計回りに外面の約3分の2の範囲に施される．この個体には赤色顔料の付着は認められない．

杯身（図15-4～6）　4は最大径17.3cm，高さ4.5cmである．口縁部は内傾する．内面の中心には当て具の痕跡が認められる．ケズリは時計回りに外面の約3分の2に施される．5は最大径16.4cm，高さ5.1cmである．口縁部は内傾し，口縁端部にはわずかに段が認められる．ケズリは反時計回りに外面の約3分の2に施される．外面には2本の直線のヘラ記号が施されている．また，外面には赤色顔料の付着が認められる．6は最大径15.0cm，高さ4.4cmである．口縁部は内傾する．ケズリは反時計回りに外面の約3分の2に施される．

無蓋高杯（図15-7）　口縁部径9.8cm，高さ12.5cmである．口縁部はわずかに外湾する．杯部の外面中程に段がある．口縁部外面および脚部には6条単位の櫛描波状文が施され，最下段の波状文の下には櫛描列点文が施される．脚部の透穴は三角形で互い違いに2段あけられている．脚部内面および杯部外面に赤色顔料が付着している．この個体のみ倒立した状態で出土しているが，上から赤色顔料が散布されたと考られる赤色顔料の付着状況を示している．

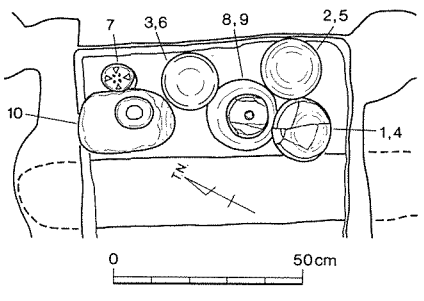


図14　棺内須恵器出土状況

壷蓋（図15-8）　口径は12.7cm，高さ4.7cmである．口縁端部は内傾する面をもち，突出した段がめぐる．天井部と体部の境界は不明瞭である．ケズリは反時計回りに外面の約3分の2に施される．外面には一部に緑色の自然釉が付着している．

短頸壷（図15-9）　高さ15.4cm，最大径18.6cmである．外面は平行タタキをおこなったあとに上部にカキメを施す．内面の底部にはユビナデの痕跡

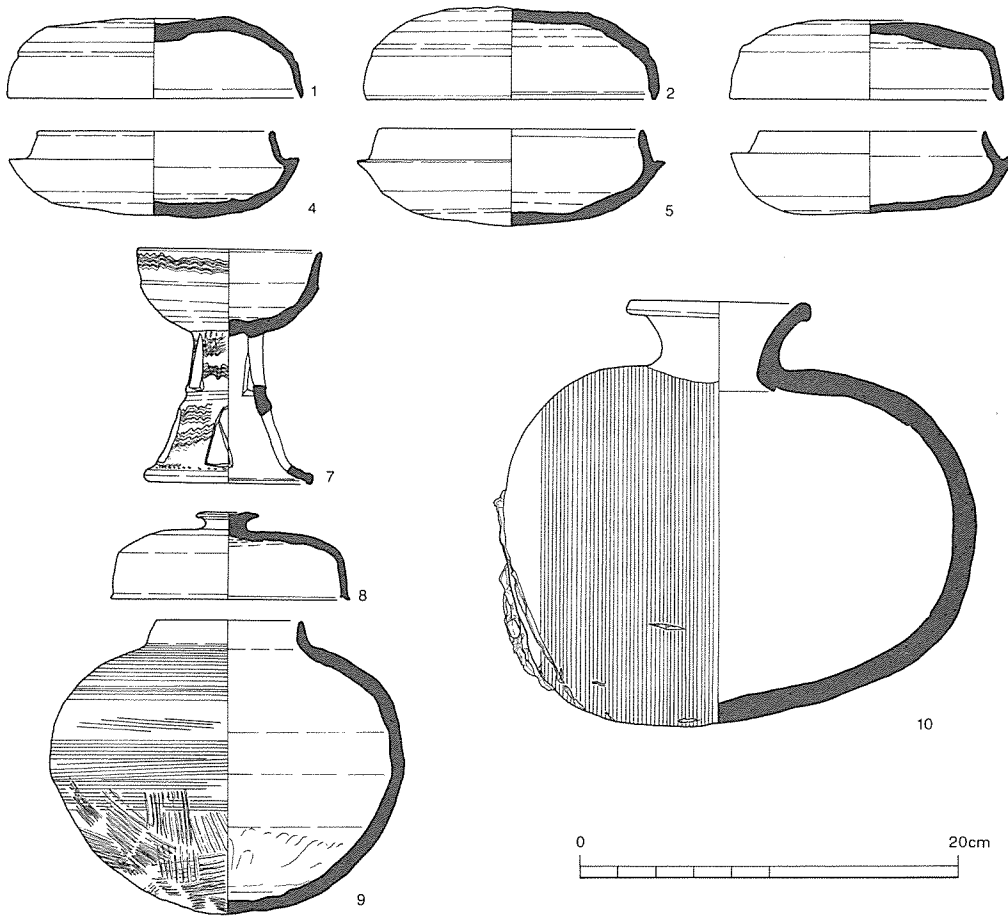


図15　棺内副葬須恵器（番号は図14と対応）

が明瞭に残る．外面の底部には赤色顔料の付着が認められる．

横瓶（図15-10）　高さ22.5cm，最大長25.4cmである．外面は1cmあたり約10条のカキメが施されている．内面はユビナデが施されている．外面には一部に赤色顔料が付着し，外面の片側の面と口縁部内外面に緑色の自然釉が多量に付着する．また，外面には焼成時に使用された固定用容器と支えが付着し剥離した痕が残っている．

これら木棺内出土須恵器の特徴は陶邑編年のTK10型式でも新しい段階に併行する時期のものであると考えられる．また，無蓋高杯を除くと，胎土や焼成，自然釉の付着の状態は後円部石室内から出土した須恵器群と共通したものであると推定される．石室内・木棺内出土須恵器の総合的な検討が今後の課題である（宮崎）．

（2）その他の遺物

後世の掘り込みないし，墓壙内の埋土からは様々な種類の土器類が出土した．ここでは，墓

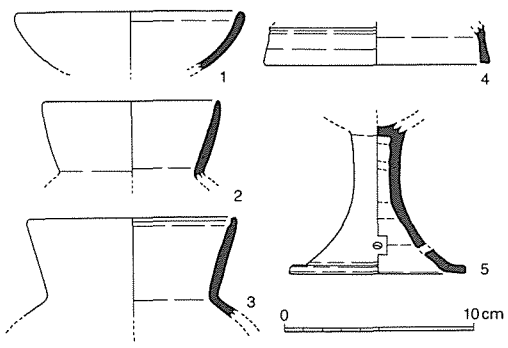


図16　その他の遺物

壙内の埋土から出土した土器を中心にして，出土遺物を説明する．なお図16の１～４は墓壙埋土中から出土したもので，５は墓壙北側の土坑から出土したものである．

土師器　１は椀の口縁部である．残存する器高は約3.1cm，復元口径は約10.2cmを計る．胎土は緻密で精良，内外面ともに横ナデで調整を施す．２，３は直口壷の口縁部である．２の残存する器高は約4.3cm，復元口径は約9.2cmを計る．また，３の残存する器高は約5.2cm，復元口径は約11.0cmである．２，３ともに胎土は緻密で，内外面ともに横ナデを施している．

これらの他にも，図化できなかったが，墓壙内の埋土からは甕などの土師器片も出土している．

須恵器　４は高杯の脚部と思われる．残存する器高は2.1cm，復元径は約12.0cmである．内外面ともに回転ナデを施す．小片であるため，杯蓋の口縁部である可能性も残される．

５も高杯の脚部である．残存する器高は7.9cm，脚部の径は9.4cmを測る．脚部には径約４～５mmの丸い孔を穿つ．残存状況から考えると，孔は４方向に開いていたと考えられる．内外面ともに回転ナデによって調整が施されているが，内面の上部については外側から絞って成形されているため，回転ナデは施されない．

なお，５は墓壙内の埋土から出土したものでなく，墓壙の北側の土坑から出土したものである．この土坑からはこの高杯以外の明確な土器はなく，この土坑の年代を決定する重要な資料である．

このほか，後世の掘り込みの層からも多くの土器類が出土している．古墳時代の須恵器や土師器のほかにも，弥生土器の甕や，中世の陶磁器（青磁・白磁・天目茶碗）や近世のものと考えられる徳利，瓦，陶磁器などが見られる．（岡寺）

4　総　括

稲荷塚古墳は，大阪大学考古学研究室と長岡京市教育委員会によるこれまでの調査によって墳丘長46m，後円部幅29.5m，クビレ部幅21.5m，後円部の現存高4mをはかる前方後円墳で，後円部に横穴式石室1基，前方部に少なくとも1基の木棺直葬が存在することが判明している．後円部石室出土の須恵器のうち，初葬段階のものがTK10型式の特徴を示すため，6世紀前葉の築造と考えられる．今回の第5次調査では，第2次調査においてその存在を上面プランで確認していた前方部木棺直葬を主要な対象とした．乙訓地域で最古期の横穴式石室と共存する木棺直葬はどのような特徴を持っているのか，という点が問題関心の中心にあった．

調査の結果，前方部に墳丘主軸に直交させて掘削した長辺5.0m，短辺3.0m（いずれも検出面上面値）というこの時期としては大形の墓壙内に，外形で長辺3.5m，幅60～70cmの組み合わせ式木棺を組み立てた埋葬施設を検出した．副葬された須恵器の型式は後円部石室内の最古段階のものと差異がないことから，古墳築造とほぼ同時期に前方部木棺直葬も行われたとみてよかろう．

木棺は木質部をすでにほとんど失ってはいたが，さいわい裏込に施された土と木質部が腐朽した部分の土との差が比較的明瞭であったため，木棺構造の復元的検討が可能であった．木棺は結合部に釘を用いない組み合わせ式のものであり，底板に相当する土質の変化が見られなかったことから，本来底板を持たない構造であった可能性が高い．

注目したいのは，棺材の組み立てにあたってまず両短辺部に丸太材を設置し，その上に側板をのせるという木棺構造である．底部に枕木状の材を敷設する木棺は，当古墳から南西700mの地点に存在する長法寺七ツ塚古墳群においても確認されている[8]．さらに周辺地域に目をやれば，大阪府富木車塚古墳，兵庫県西山古墳群，奈良県石光山48号墳などでも類似の埋葬施設がみられる[9]．いずれもTK10型式期前後の事例である．6世紀前葉においては奈良県三倉堂遺跡のような蟻枘組みの木棺，奈良県石榴垣内1号墳のような釘組みの木棺などいくつかの異なるタイプの木棺がすでに確認されている[10]．これらとくらべても，枕木状の材の上に組み立てる当古墳の木棺が構造力学的に特段の利点を持っているとは考えにくい．こうした多様な木棺がかなり広い範囲で斑状に分布することの背景を検討する必要があろう．

副葬品は水晶製算盤玉37，切子玉2，細身の銀製耳環2，短刀1，鉄鏃10以上，須恵器10という構成であった．これらも，この時期の木棺直葬墓に通有に見られるものであり，先の棺構造とあわせて，かなり共通した葬送習俗の普及をうかがわせる．

今回調査した木棺は長辺3.5mという規模であり，前述の長法寺七ツ塚古墳群など近隣の古墳群の中心主体に用いられたものよりもさらに一回り大きい．こうした大形棺でもなお前方部に埋葬されているという点に，墳丘長46mとはいえ，前方後円墳であることの階層的優位性が如

実に現れている．そして，その後円部埋葬施設は乙訓地域で最古段階のいわゆる畿内型横穴式石室であった．つまり，当地域では伝統的な木棺直葬墳を造営してきた集団の頂点に立って前方後円墳を築きうる首長層からまず横穴式石室が採用されたということであり，畿内型横穴式石室の導入が単なる新奇な葬制の流行ではなく，中央政権による首長層の身分的位置づけといった政治的要素を持っていたことを強く示唆する．

稲荷塚古墳の存在する長岡京市北部地域では，前方後円墳を含む大小の古墳造営が6世紀前葉頃から活発になっていく．それ以前の中期段階に顕著な首長墳が不明瞭であることとは対照的な展開である．こうした変化の節目にあたるのが地域最古段階の横穴式石室を持つ稲荷塚古墳であることを考えると，この古墳の登場自体が6世紀初頭の継体朝成立に関連する首長系譜変動の一端を反映している可能性も浮上してくるのである．

なお，今回併せて測量調査を実施した井ノ内車塚古墳は，このような長岡京市北部の古墳時代後期の首長系譜分析を深めるためにはぜひとも実態を明らかにしなくてはならない古墳の一つである．測量調査においては，墳丘長42ｍの前方後円墳の形態を把握するとともに，墳丘の改変状況についても詳しい観察を行った．得られた情報は来年度に予定している墳丘調査の計画策定に役立てていきたい．（福永）

注

1）都出比呂志　1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号　大阪大学文学部．

2）注1）に同じ．

3）堤圭三郎，高橋美久二　1968「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財調査概報』1968京都府教育委員会．

4）注3）に同じ．

5）山本輝雄　1988『長法寺七ツ塚古墳群』長岡京市教育委員会．

6）秋山浩三・山中章　1988『物集女車塚』向日市教育委員会．

7）梅原末治・濱田耕作　1923「近江高島郡水尾村の古墳」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』8京都大学．

8）注5）に同じ．

9）白石太一郎ほか　1976『葛城・石光山古墳群』奈良県教育委員会，高島信之・潮崎誠　1983「西山・奈良山古墳群」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰ，三田市教育委員会，上田舒ほか1960『富木車塚古墳』大阪市立美術館．また，このような埋葬施設の構造的検討を行ったものとして高島信之・平田学　1997「兵庫丹波の古墳時代の木棺構造」『第15回但馬考古学研究会・両丹考古学研究会交流会資料』．

10）岸熊吉　1930「木棺出土の三倉堂遺蹟及び遺物調査報告書」『奈良県史蹟名勝地調査報告書』第12冊，奈良県，および岡林孝作編　1997『石榴垣内遺跡』橿原考古学研究所．

図　版

調査区全景（西から）

1　木棺全景（西から）

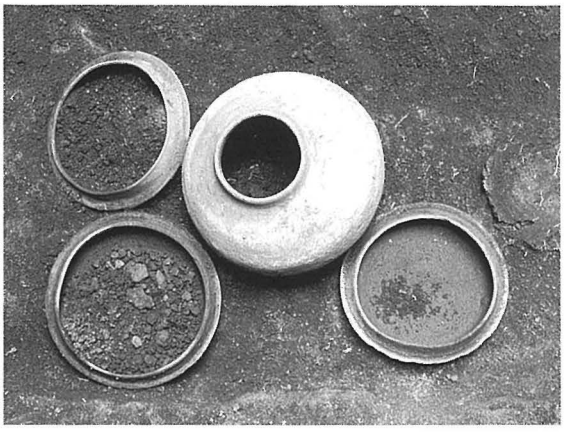
2　副葬品配置状況（西から）

1　木棺東小口（西から）

2　木棺西小口（西から）

1　土器副葬状況

2　高杯副葬状況



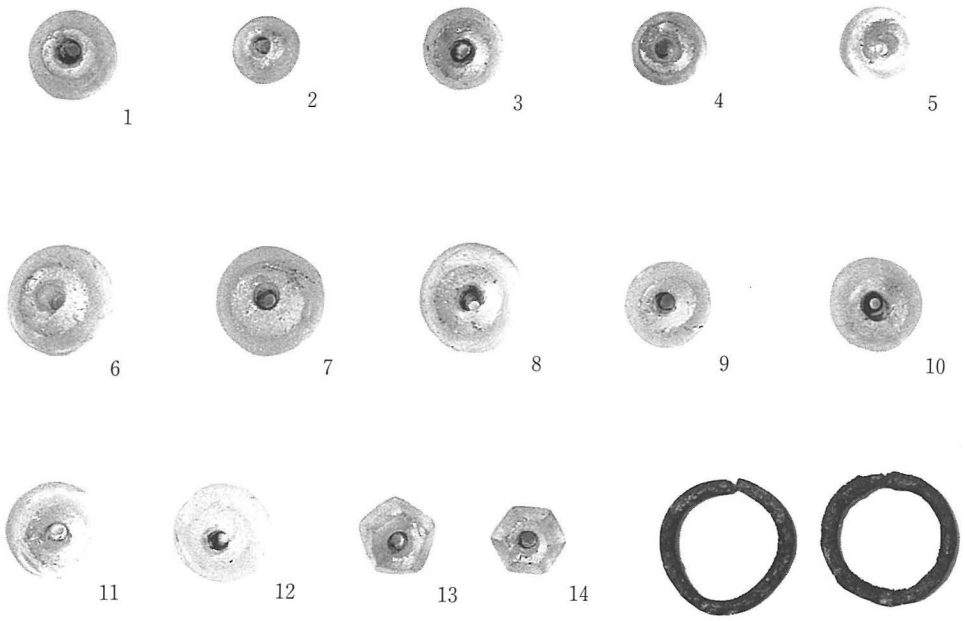
3　杯・短頸壺の内部

4　杯6の内部

5　土器取り上げ後の状況

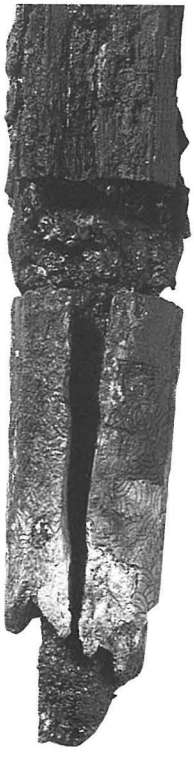
1　短刀・玉類出土状況

2　鉄鏃・手玉出土状況



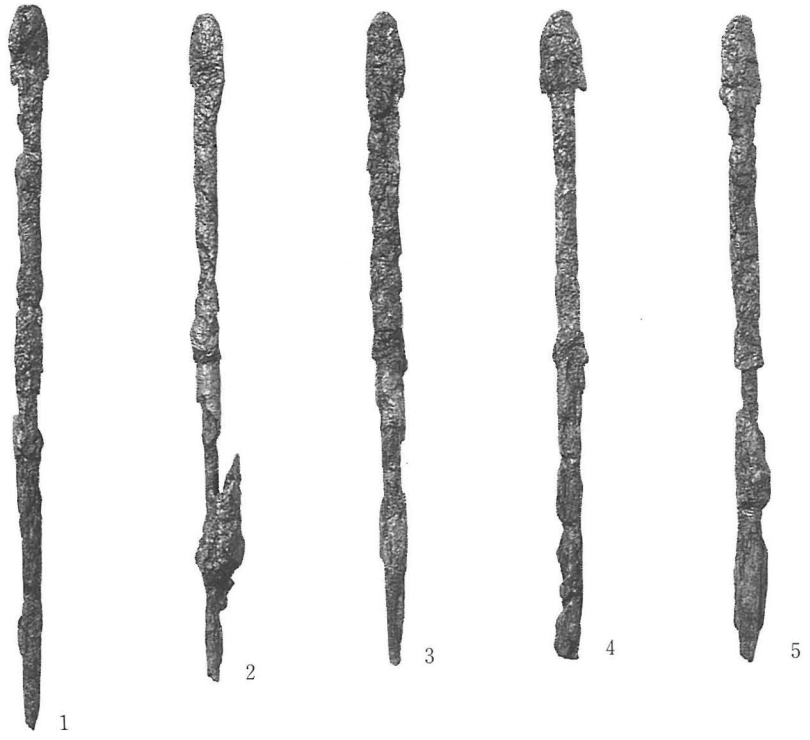
1　装身具（番号は図10に対応）

2　短刀



3　鹿角製刀装具（表）

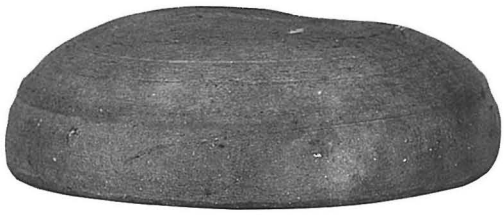
4　鹿角製刀装具（裏）



1　鉄鏃（1）（番号は図12に対応）

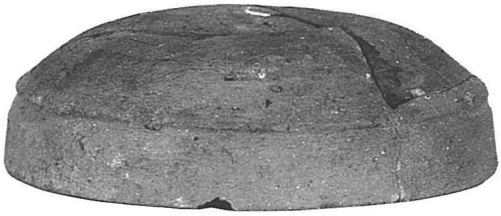
2　鉄鏃（2）（番号は図12に対応）

1


2

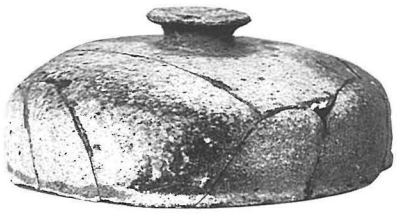
4

5


3

7

6


8

9

10

棺内副葬須恵器（番号は図15に対応）

古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究

平成８年度～平成10年度科学研究費補助金

（基盤Ｂ・一般２）成果報告書

発行年月日　1999年３月

編　集　者　都出比呂志

発　　行　大阪大学文学部

印　　刷　真　陽　社

POLITICAL CHANGES IN KOFUN-PERIOD JAPAN: ANALYSES OF REGIONAL SHIFTS IN LEADERSHIP AUTHORITY

March 1999

Faculty of Letters
Osaka University